

1. 解表剤

発汗・解肌・透疹等の作用により、表証を解除する方剤を解表剤と総称している。

『素問』陰陽応象大論に「其ノ皮ニ在ルハ汗シテ之ヲ発ス」とあるように、外邪が表にある場合の治療原則は発汗法である。

肌表は人体の最も外側にあるので、外邪が人を傷ると、一般にまず表証を現す。解表剤はおもに外感病の初期に使用される。もし表証と裏証やぶがともにある場合は表裏双解法を用いる。病邪が完全に裏に入り終わった段階には、解表剤は用いてはならない。

表証では、脈は一般に浮脈を呈し、舌はあまり変化は見られない。

解表剤には、風寒表証（表寒）に対して用いられる辛温解表剤と、風熱表証（表熱）に用いられる辛涼解表剤とがある。

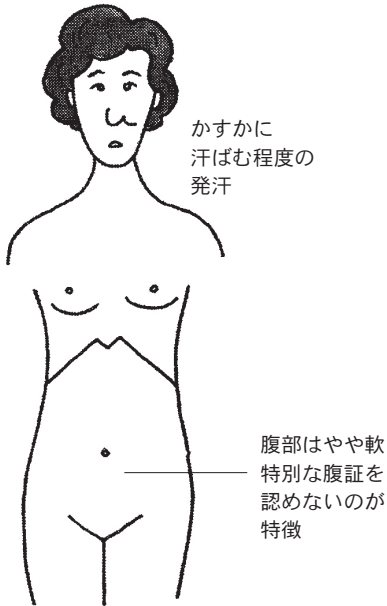
辛温解表剤

桂枝湯，麻黄湯，葛根湯，葛根湯加川芎辛夷，小青竜湯，川芎茶調散，麻黄附子細辛湯。

辛涼解表剤

麻杏甘石湯，五虎湯，升麻葛根湯。

けいしとう 桂枝湯 (傷寒論・金匱要略)



かすかに汗ばむ程度の発汗

腹部はやや軟特別な腹証を認めないのが特徴

方意

おもに太陽病に用いられるが、漢方の最も基本的な薬方であり、「衆方の祖」と称されている。

病位は太陽の経脈が侵された太陽の中風、すなわち表寒虚証である。症状は軽く、皮膚が少し汗ばむ程度の発汗がある。

脈は浮弱（緩）。

舌は正常所見で、淡紅湿潤で無苔か薄い白苔。

診断のポイント

- ① 悪風があり発熱，頭痛
- ② 少し汗ばむ傾向（自汗）
- ③ 脈は浮で弱，あるいは緩
- ④ 特別な腹証はない

原典

太陽ノ中風ハ陽浮ニシテ陰弱。陽浮ノ者ハ熱自ラ発ス。陰弱ノ者ハ汗自ラ出ズ。蓄蓄トシテ悪寒シ，淅淅トシテ悪風シ，翁翁トシテ発熱シ，鼻鳴リ乾嘔スル者ハ桂枝湯之ヲ主ル。（『傷寒論』太陽病上篇）

太陽病，頭痛，発熱シ，汗出デ悪風スルハ桂枝湯之ヲ主ル。（同）

病常ニ自ラ汗出ズル者ハ，此榮氣和スト為ス。榮氣和ス者ハ外諧サズ，衛氣榮氣ト共ニ諧和セザルヲ以テノ故ニ爾ラシム。榮脈中ヲ行キ衛脈外ヲ行ルヲ以テ，復タ其ノ汗ヲ発シ榮衛和スレバ則チ愈ユ。桂枝湯ガ宜シ。（同・太陽病中篇）

処方

ケイシ（桂枝）……………4.0g	タイソウ（大棗）……………4.0g
シャクヤク（芍薬）……………4.0g	ショウキョウ（生姜）……………1.0g
カンゾウ（甘草）……………2.0g	

構成

君薬 臣薬 佐薬 使薬

桂枝 — 芍薬 — 甘草 — } 大棗
生姜

この君臣佐使は汪昂『医方集解』に拠る。南京中医学院編の『方剂学講義』では、大棗・生姜が佐、甘草が使としてある。

成無己『傷寒明理薬方論』では、君薬は桂枝、芍薬と甘草がともに臣佐、生姜と大棗が使薬となっている。

方義

桂枝：辛甘温。発汗解肌作用，営衛を調和させる。（日本薬局方では桂皮を用いる）

芍薬：苦酸微寒。陰気を収斂し血脈を和す。白芍薬を用いる。

甘草：甘平。汗剤に入れば解肌・抗利尿作用により津液を保護する。生甘草ではなく炙甘草を用いる。

生姜・大棗：脾胃の機能を補養し，営衛を整える。

全体としては辛温解表の剤となっている。中風は発汗させ過ぎてはならず，ただ解肌して表邪を退散させるべきである。本方はまた営衛を調和する主方であるから，外感病の他にも温経散寒剤として応用される機会も多い。

八綱分類

表寒虚証

臨床応用

体力が衰えたときのカゼの初期や鼻カゼの段階。老人や身体虚弱な人のいわゆる「万年カゼ」症状。病後や産後の微熱や寝汗。

類方鑑別

麻黄湯：表寒実証。悪風発熱が強く，無汗，体痛あり。脈浮緊。（太陽傷寒）

葛根湯：比較的実証。表実。無汗で項背強痛が著明。脈浮実。（太陽と陽明の合病）

五積散：五積散は「経絡の中寒」の薬方であるから，その方証は虚証で悪寒が強い。

香蘇散：虚証で，胃腸が弱く，気うつ傾向のある人のカゼ症状。（気滞感冒）

参蘇飲：虚証で，脾胃虚弱，痰飲を伴う人のカゼ症状。（気虚感冒）

麻黄附子細辛湯：元気に乏しく，発熱は少なく，悪寒が強い人のカゼで，脈は沈弱。（陽虚感冒）